

飛騨農林事務所の普及活動状況

令和3年9月30日現在

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■夏秋トマト データ駆動型農業実証ほ サイドビニル実証試験開始

夏秋トマト栽培では、秋季に雨よけハウスの開放部を被覆し保温することによってトマトの色づきを促進している。しかし、被覆により湿度が高まることで果実の結露が発生しやすくなり、果実の病害や汚れの発生による品質低下の原因となっている。

管内では、生産者団体（飛騨夏秋トマトスマート農業協議会）が「データ駆動型農業の実践体制づくり支援事業」を活用してこの課題解決に取り組んでおり、参加生産者のうち8戸がハウス内湿度を制御するための被覆用サイドビニルの自動開閉機を導入した。

農業普及課では、湿度の制御による結露発生の実態を把握するため、実証ほ8戸に模擬果実温センサ（開発：静岡県）を設置して果実温度データの収集を開始した。今後は、生産者のハウス内環境モニタリングデータと合わせて分析を行い、果実の結露を軽減し、品質の向上を目指す。



【模擬果実温センサを設置して実証試験を開始】

■ほうれんそう アシストスーツ活用に向けた予備調査（スマート農業加速化実証事業）

ほうれんそうスマート農業実証取組の1つとして導入されたアシストスーツは姿勢維持に高い効果があると分かり、前かがみの姿勢が多いトマトの選果作業でも活用が見込まれる。そのため、8月26日に高山市内にあるトマト集荷場で着用時の安全性、作業性の予備調査を行った。

今後、選果場の作業員にアシストスーツを着用して選果作業に従事してもらい、着用時の身体負担軽減効果について聞き取り調査を行う。



【負担軽減に期待大】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■白川村美味しい米づくり研究会 食味コンクールに向けて現地研修会を開催

白川村美味しい米づくり研究会では、10月末に開催される地域の食味コンクールに向けて、出品候補の選定を兼ねた現地研修会を9月16日に行った。研究会の指導者に委嘱されている鍵谷中山間農業研究所長を招へいし、会員のは場を巡回し出品用の試料の採取等について個別に研修を行った。

昨年は会員から地域の食味コンクールと米・食味分析鑑定コンクール国際大会で入賞者を輩出しており、今年こそは自分もと参加した会員の意欲は高かった。

農業普及課では、村役場の担当者とともに鍵谷所長に同行して収穫の適期や出品用試料の調整について指導を行った。今後も村役場と連携して食味コンクールでの上位入賞に向けた指導を継続していく。



【鍵谷所長による
若手会員への指導】

■宿儺かぼちゃ 第17回宿儺かぼちゃ品評会

飛騨高山のブランド野菜である宿儺かぼちゃが出荷最盛期を迎え地域のスーパーや直売所のみならず、都市圏のスーパーでも販売され食卓を彩っている。

生産者の技術向上のため、かぼちゃの品質を競う品評会が開催された。昨年同様コロナ蔓延防止に配慮して、関係者のみでの開催となったが、一般部門 30 点、大物部門 8 点、ユニーク部門 21 点、および今年から新たに設置された字彫り部門 28 点の出品があり、行政や市場関係者、J A 職員による厳正な審査が行われた。

宿儺かぼちゃ研究会は設立 20 周年の節目を迎え、アニメ呪術廻戦をきっかけに「両面宿儺」の知名度が向上していることに追い風を吹かそうと字彫り部門を設置し、宿儺かぼちゃを通して地域を盛り上げようと努力している。若い果実に傷をつけることでかさぶた状に文字が浮かび上がる特性を利用した取組みで、宿儺かぼちゃの新たな一面を見せてくれている。

農業普及課では、今後も研究会と連携し、高品質な宿儺かぼちゃの生産、ブランド維持に努めていく。



【形や色などを評価】



【字彫り部門】

■夏秋トマト アザミウマ対策が奏功して被害軽減

平成 29 年に岐阜県で初めて確認された茎えそ病が昨年度に 1 戸の農家で約 1,300 株が収穫不能になる甚大な被害が発生した。

農業普及課では、茎えそ病による被害軽減を目的とし、同病を媒介するミカンキイロアザミウマ防除対策を農業経営課、農業技術センターと連携して打ち立て、生産者による対策の実践を支援した。

基本的な雑草管理に加え、本ほ周辺の風上側への防風ネットの設置、苗段階からの徹底対策のため、育苗ハウスを囲うように高さ 1 m 以上の衝立（侵入防止）の設置、0.4mm 目合いネットによる育苗ハウスの被覆、薬剤耐性検定に基づいた農薬によるアザミウマ防除の結果、今年のトマト茎えそ病の発生は 13 株となり、昨年度に比較して被害は 100 分の 1 となった。

青色粘着版に付着したミカンキイロアザミウマの補殺数は、6 月中旬にピークを迎え、ハウス外では 34 頭だったが、育苗ハウス内は 2 頭であり、昨年同時期でのハウス外 38 頭、ハウス内 26 頭に比べ補殺数が明らかに減少した。来年度も本対策を継続し、被害ゼロに向けて指導を行っていく。



【育苗ハウスのアザミウマ対策の様子】